

Title	生命(いのち)を支える看護師の資質向上に関する研究
Author(s)	大野, 知代
Citation	大阪大学, 2009, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/49460">https://hdl.handle.net/11094/49460</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">大阪大学の博士論文について</a> をご参照ください。

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	大野知代
博士の専攻分野の名称	博士(人間科学)
学位記番号	第22632号
学位授与年月日	平成21年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文名	人間科学研究科人間科学専攻 生命を支える看護師の資質向上に関する研究
論文審査委員	(主査) 教授 藤田 綾子 (副査) 教授 金澤 忠博 准教授 権藤 恭之

## 論文内容の要旨

### 第1章 問題の背景

わが国は、1955(昭和30)年には自宅で亡くなる人が80%を占めていたが、1975(昭和50)年には50%に減少した(人口動態統計,2004)。現在では80%の人が医療施設で亡くなり、自宅で亡くなる割合は10%に減少した。そういった中で筆者は、医療施設の医師や看護師の死についての考え方や死の教育の実態を通して、日本の看護教育における死の教育や臨地実習のあり方を検討する必要があることが示唆された。

そこで、本研究では生命を支える看護師の資質向上のためには、看護師の死に対する考え方を調査して現状を把握し、今後の看護教育における教育内容についての課題を明らかにすることを目的とした。

### 第2章 看護師の資質向上をめざす現状と課題

本章では、看護師の名所変更に伴い最初の看護師となる看護学生(以下学生)が看護師の職務をどのように意識しているか、名称変更がどのような影響を与えているかについて調査した結果、次のようなことが明らかになった。1)学生の意識では名称変更は肯定的に受け止められ、男女機会均等の思想が定着していた(36名,54.6%)。2)名称変更が「好ましい」とした項目の中でも、特に社会と関わる項目にある他職種(48名,72.8%)や社会の人からの見方が高まる(41名,62.1%)など外部の人の認識が変わるという意識がある。3)8割以上の学生が死に関して高い意識を持っており、生命について学ぶことに強い関心があることが推察された。また、4)医師と同じ地位にみられず(31名,47.0%)、看護は医師の指示によって行うという従来の考え方が根強く残っている。

つまり、名称変更によって医師との関係など、病院内での仕事は変わらないが、社会的な位置づけが変化するであろうこと、また、教育内容を充実させて資質向上を図ることに期待があることを示唆していた。

### 第3章 日独の看護しに関する生死の教育—生命との別れ—

本章は、高齢者の病棟に勤務している日独の看護師の死に対する態度について調査し、

今後の看護教育に必要とされる死の教育の課題について考察した。河合（1996）の死に対する態度尺度（DAP）を用いて日独の比較を行った結果、尺度の20項目の「そう思う」～「そう思わない」と回答する日独の一致率は0.79とかなり高い値が認められた。すなわち、日本において「そう思う」方向へ得点が高い項目はドイツにおいてもそう答えている傾向にあった。「そう思う」と評価される項目は、河合の分類の「死の恐怖」に含まれる項目であり、「そう思わない」と評価される項目は、「回避的受容」に分類されている項目であった。日独で不一致の傾向にある項目についてみると、ドイツでは日本より死を現世的にとらえ、日本はドイツより死後の世界をやや肯定的受け止めていることが推察された。回答全体を通して、日本には「どちらとも思わない」と回答する人が、ドイツより多い項目が20項目中10項目もあり、日本の看護師に死に対する態度を明確にしない傾向のあることが示唆された。

このことは死に対する態度が、宗教的信念によるものや看取りの体験、普段の高齢者病棟での看護から判断した迷いや戸惑いの影響を受けていると考えられる。にもかかわらず、わが国の看護教育では、死の教育について体系的な理論教育や臨地実習が行われていないことも問題であることが考察された。一方、ドイツでは、「魂をケアする人」という聖職者の役割も日本では看護師が担当していることから、わが国における看護師が死に対する態度を確立させることの重要性が示唆された。従って、死に対する考え方や態度には、「生」と「死」を統合してみていく科目の体系化、さらに学生が死を身近なこととして受け入れる状況と環境を想定することが先決であることが指摘された。

#### 第4章 看護学生への<sup>いのち</sup>生命の教育—<sup>いのち</sup>生命との出会い—

本章では、母性看護学実習（生命誕生の場面）を体験した学生の実習記録から、①学生たちは実習によって何を学習しているのか、学習している内容を調査し、②分類を行い、③学習内容の出現頻度が高いカテゴリーを選択し、その分析を通して生命誕生の場面を教材にした授業の意義について考察を行った。

その結果、47名の学生が記録に表現した学習内容は、12カテゴリーに分類することができた。母性性・女性性の賛美については（52名,89.7%）、身体の神秘・生命尊厳については（50名,86.2%）の学生が記述しており、単に生命を生み出す産婦の理解だけでなく、同時に生命の尊厳の学びと結びついた学習になっている。この2項目は、他の看護学実習では得られない生命誕生場面に特有のものであり、初めて「生命」ということを自身の心に刻む瞬間の場でもあることが考察された。

#### 第5章 総合論議

本章では、看護師の資質向上のための基礎的な学びとして、生命を支えることの学習の必要性が重要であり、そのことを看取り教育、生命誕生の教育の視点から考察しまとめている。「生命を支える看護師の資質向上に関する研究」において得た結論は以下の通りである。1）日独の看護師の「死に対する態度」については、両国の違いは宗教の有無に関係なく、「死の恐怖」はどの看護師にも存在することが明らかになった。また、その恐怖には個人差があるため、すべて恐怖を取り除くことは不可能である。患者には「共にいる」ことが安心感につながり、良き看取りに至っている。2）看取り教育は体系化されていないので、早急にカリキュラムの改善よりもむしろ改革が先決である。3）従来の看護教育の枠組みである知識・技術・態度には専門性が先行して脱人間化している看護師の姿に気づくことが少なくない。つまり、「医療の限界は生命の限界ではない」という「生命を支

える」哲学や信念があれば、看取りがマンネリ化したり、死に対して鈍感になることを防ぐことにつながるものと考えられる。従って、思いやり、力量、折り、忍耐という態度の領域が関連しあって、1人の人間をかけがえのない尊い存在としてみていくことが、看護師の資質向上の原点なのである。「先ず臨終の事を習うて後に他事を習うべし」とあるように、看取りの看護を看護教育において体系化することであり、可能な限り看取りの看護が学生の段階で体験できることである。そして、「生命を支える」意味を先ず学ぶことに資質向上の教育的意義のあることを教えることを確認した。

#### 論文審査の結果の要旨

本論文は、看護師の資質向上のためには専門教育としての「知識・技術・態度」とともに基本的な教育として「命を支える」教育の必要性を実証的方法を用いて、また、日本の医療の原点であるドイツの看護師の態度との比較を通して検討したものである。

具体的には、看護婦から看護師へと名称変更されたことによる看護学生の意識、看護学生への生命の教育としての生命誕生の実習による学びの実態、生命との別れに関する教育の日独比較が検討された。その結果、看護師の資質向上をめざして看護婦から看護師への名称変更について学生は歓迎しながらもそれは、外部からの評価についてであり、資質向上のためにはカリキュラムの充実を望んでおり、特に死に関する教育の必要性を望んでいることが明らかになった。生命誕生の実習については母子関係、母性、産婦の心理などの理解以上に生命の尊厳・神秘について多くを学ぶことができることを明らかにした。生命との別れである「死」について看護師の意識の日独比較では、共通する点と異なる点が明らかになった。特に異なる点は、宗教をバックに持ち、看取り実習を行っているドイツの看護師は宗教を持たない、看取りについて実習が不十分である日本では死についての考え方が「どちらとも言えない」という曖昧な意識を持つ傾向があることが明らかになった。これらの結果から、高学歴化する看護師が自らの仕事について「生命を支える」という基本的な使命を持ちながら専門職としての知識・技術・態度を身につけるためには、現在のカリキュラムの中で生命のスタートとしての「生命誕生の実習」の重要性とともに新たに「看取りの実習」を充実させることの必要性を指摘し、今後の看護教育のあり方に新しい視点を導入することについて観念的のみでなく実証的に示すことが出来た。以上から、本論文は博士（人間科学）の学位にふさわしいものと判定する。